

令和 3 年 度 自 己 評 価 表

鳥取県立鳥取盲学校

学校教育目標	視覚障がいのある児童生徒一人一人の自立と社会参加をめざし、教育的ニーズに応じた教育を行うとともに、豊かな心とたくましく生きる力を育てる。 (ミッション) 自分らしく、一人一人が輝いて生きる力を育てる。(QOLの向上) (キーワード) 「つながる」
--------	---

今年度の 重点目標	①主体的な学びに向かう授業実践（専門性の向上） ②キャリア教育の推進 ③仲間と協力し、生活を工夫する児童生徒の育成 ④チームで取り組むセンター的機能の充実 ⑤児童生徒の健康と安全を守る教育の推進 ⑥環境整備を通じた業務の改善
--------------	---

年 度 当 初							最終結果（ 1 ）月		
評価項目	部科・分掌	評価の具体項目	現状	(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評価基準	経過・達成状況	評価	次年度への方策
①学習指導の充実及び専門性の向上	小中学部	○児童生徒が、主体的に学習に取り組む態度を養い、言語活動を通して基礎的な知識の定着及び技能の習得を図る。	○児童生徒の学習意欲は高まり、基礎的な知識は定着しつつあるが、言語活動を通しての技能の習得については指導が必要である。	○児童生徒が主体的に学習に取り組めるようになり、言語活動を通して基礎的な知識の定着及び技能の習得ができています。	○月1回の部科会やグループ研等を通じ、児童生徒の状況に関する情報交換を日常的に行い、支援や指導方法の改善を図る。 ○I C T機器等を活用したり、触察等の体験的活動を取り入れたりして、言語活動を充実させ、主体的に学習に取り組めるよう教材教具を工夫する。	児童生徒の学習状況による評価 A：児童生徒が主体的に学習に取り組み、言語活動を通して、基礎的な知識・技能の習得ができた。 B：児童生徒が主体的に学習に取り組み、言語活動を通して、基礎的な知識・技能の習得がだいたいできた。 C：児童生徒が主体的に学習に取り組み、言語活動を通して、基礎的な知識・技能の習得があまりできなかった。 D：児童生徒が主体的に学習に取り組み、言語活動を通して、基礎的な知識・技能の習得がほとんどできなかった。	部科会やグループ研、授業研、校内研修を通して児童生徒の情報交換をし、言語活動の充実を図った。言語活動を通じて、児童生徒の主体的に学ぶ姿が見られるようになり、知識の定着や技能の習得を図りつつある。	B	引き続き、児童生徒が主体的に学習に取り組めるような言語活動や体験活動を取り入れていく。また、グループ研等を通じて、主体的に学習に取り組む態度や言語活動について評価を共有していく。
	普通科	○生徒が主体的に学習に取り組み、苦手なことや課題にも向き合い、克服できるように学習活動の工夫と改善を図る。	○日々の学習や集団活動を通して経験を積み重ね、概ね落ち着いて学習に取り組んでいるが、自己理解が不十分であったり、苦手な活動には消極的になってしまったりすることがある。	○生徒が自らの良さ、個性を生かしながら主体的に学習に取り組み、苦手なことや課題にも向き合い、克服しようとしている。	○生徒が自己理解を深め、主体性が高まるよう、生徒が自分で学習の目標を立て、学習後に目標の振り返りを行う。 ○主体的に学習参加する力を育てる集団活動の場面や役割を設定する。	○生徒にアンケートをとり、その結果をもとに部科教職員で評価を行う。 A：集団活動における適切な場面や役割の設定がなされ、全ての生徒の学習に対する主体性が高まった。 B：集団活動における適切な場面や役割の設定がなされ、半数以上の生徒の学習に対する主体性が高まった。 C：集団活動における適切な場面や役割の設定がなされたが、学習に対する主体性が高まった生徒は半数未満だった。 D：集団活動における適切な場面や役割の設定がなされず、全ての生徒の学習に対する主体性が高まらなかった。	生徒のアンケート回答では、主体性「とてもよくできた：1名、よくできた：2名」の意識が高く、各授業の目標設定と振り返りも3名とも「よくできた」と回答している。集団での役割についても、「全ての活動で役割があった：1名、ほとんどの活動で役割があった：2名」となり、中間評価より評価は上がった。	A	来年度も生徒が学習に目標を持ち、学習の最後に振り返りを行うことで達成感を味わうことができるようにする。自分の得意なことをいかすことができるような集団学習での役割設定を行うことと、苦手なことにも少しずつ取り組んでいけるような活動を取り入れることで自己理解を深め、苦手なことや課題に向き合う気持ちを育てていく。
			○社会経験やいろいろな人との関わりの経験が少なく、状況や場面に応じたコミュニケーションや社会人としてのマナーについての学習が十分ではない。	○状況や場面に応じたコミュニケーション能力が高まり、目標設定した社会人として必要なマナーや態度が身に着いている。	○活動の見通しをもてるよう、状況や場面に適した思いを伝える言葉とその使い方の例示を行う。 ○報告・連絡・相談や自分の思い、体調などを表出する場面を学習に取り入れ、随時評価を行う。	○作業学習や自立活動など関連する学習の評価をもとにして部科教職員で評価を行う。 A：全ての生徒のコミュニケーション能力が高まり、社会人として必要なマナーや態度が身についてきた。 B：半数以上の生徒のコミュニケーション能力が高まり、社会人として必要なマナーや態度が身についてきた。 C：1名の生徒のコミュニケーション能力が高まり、社会人として必要なマナーや態度が身についてきた。 D：全ての生徒のコミュニケーション能力が高まりらず、社会人として必要なマナーや態度が身についていない。	朝の健康観察や、帰りの会での1分間スピーチなどに継続的に取り組み、自分の体調や感じたことを表出する機会を多く持った。各教科・領域の学習でも教師とのコミュニケーションや報告・連絡・相談をする場面を設定した。しかし、校内ではできることでも、産業現場等における実習ではコミュニケーションが不十分であるとの評価を受ける生徒が多かった。	C	校内では教科横断的に取り組んで指導を継続することと、産業現場等における実習中に実社会で実践ができるかどうかを評価していく。
	保理専攻科	○生徒が主体的・対話的に学び、目標への見通しを持って粘り強く取り組むことをめざした授業改善を図る。	○生徒は資格取得に向け、積極的に学習に取り組んでいる。 ○次期学習指導要領に向けた指導方法の研究への取組は今後も継続が必要である。	○教職員は、自ら進んで学び、目標達成に向けて取り組む生徒の姿を考えた授業改善に、部科全体として取り組んでいる。	○生徒の目指す具体的な姿を考えた授業の改善・工夫についての研究会を年間10回以上実施する。 ○合同学習や課題研究などで、自己の学習成果を確認したり、取組への動機づけとなるような課題を設定する。	授業の工夫・改善に対して部科としての取組状況により評価。 A：工夫改善の具体的な取組が進み、全員が取組を共有できている。 B：工夫改善の具体的な取組が進んだ C：工夫改善への方向性が決まった。 D：工夫改善への方向性が定まっていない。 E：工夫改善への取組が全くない。	・月1回の研究会で、授業の改善・工夫のための取り組み内容について部科全体で情報を共有した。 ・次期学習指導要領に対応し、新たな単元目標を盛り込んだ年間指導計画の見直しを行い、研究会で情報共有した。 ・学期末の専攻科合同学習、専攻科2・3年の課題	A	研究を通して共有した課題や取り組みの成果を、指導計画に基づいた具体的な実践、授業改善に活かしていく。

			○新型コロナウイルス感染予防対策として、iPadを活用したオンライン授業を行ってきている。現在はPCを活用することでオンライン授業の幅を広げようと取り組んでいる途中である。	○生徒は、学習や復習、演習問題の活用などにICTを活用することで、自己の学習成果を確認している。	○生徒の実態や目標に即したICT活用の方法を実践し、学習教材や課題の提供、授業の工夫を行う。 ○生徒アンケートを行い、授業や指導の改善に活かす。	授業の工夫・改善に対して部科としての取組状況により評価。 A：工夫改善の具体的な取組が進み、全員が取組を共有できている。 B：工夫改善の具体的な取組が進んだ C：工夫改善への方向性が決まった。 D：工夫改善への方向性が定まっていない。 E：工夫改善への取組が全くない。	研究発表などを通して、生徒は学んだ知識を活用したり深めたりすることができた。		
	教務部	○学習指導要領等の周知を図るとともに、教育課程編成の中核を担う。	○来年度より高等部学習指導要領が年次進行で実施となるため、新学習指導要領に対応した教育課程を編成する必要がある。また、大学入学共通テストに対応した教育課程の検討が必要である。	○新学習指導要領や大学入学共通テストに対応した高等部教育課程を編成する。	○「鳥取県立高等学校 教育課程編集・実施の手引き」の内容を関係教職員に情報提供する。 ○他校の教育課程や大学入学共通テストに関する情報を収集し、参考にする。 ○教育課程委員会と部科会で連携して教育課程を編成する。	高等部教育課程編成の進捗状況による評価 A：教育課程を申請し、承認された。 B：教育課程を申請した。 C：原案を作成し、検討中である。 D：原案を作成中である。	12月に申請し、承認待ちである。さらに来年度に向けて、学習評価方法の見直しや、部科行事・学習の概要について計画を進めている。	B	高等部において新学習指導要領に沿った指導の実施とともに、大学進学に向けた教育課程の運用についてさらに検討を進める。
	教育研究部	○各教科・科目等での指導・支援の充実を図り、授業の工夫・改善に取り組む。	○昨年度は、部科ごとの研究1年目として、研究会（年間9回のグループ研究会と月1回の部科会の研究会）、授業研究会を実施し研究に取り組んだ。研究報告会では、各部科ごとの取組を全職員で共有できた。各グループでは、一定の成果とともに課題も出てきている。課題について、具体的な改善策を立て、全職員で共通理解をして2年目につなげていきたい。	○昨年度の研究成果と課題をふまえ、今年度、研究2年目として部科ごとに各研究主題に沿って指導・支援を工夫し、計画を立て協力して研究に取り組む職員集団。	○年間9回のグループ研究会と月1回の部科会の研究会を部科ごとの研究会として実施 ○1回の全体報告会の実施 ○年間3回の授業研究会の実施（部科ごとに1回） ○教職員の相互授業参観を通して、お互いの授業を参観し、気づきあい学びあいをすることで研究の推進、専門性の向上、授業力の更なる向上につなげる。	○職員アンケートにより、研究・授業改善について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 A 3分の2以上の職員 B 半数以上3分の2未満の職員 C 3分の1以上半数未満の職員 D 3分の1未満の職員	・研究2年目として部科ごとに各研究主題に沿って計画を立て協力して研究に取り組んだ。研究授業も全学部が取り組んだ。研究に意欲的に取り組めた割合が増えた半面、あまり取り組めなかった割合が変わらなかった。2学期末には各学部の研究の状況を全職員で共有できた。各部科ごとに研究の成果と課題を整理し来年度につなげたい。	B	引き続き、部科ごとに研究テーマに沿って指導・支援を考え計画を立て研究に取り組み、研究3年目に向けて準備を進める。
① 学習指導の	教育研究部		○児童生徒は、研究の実践（主体的・対話的で深い学び）を通して、新しい時代に必要となる児童生徒の資質・能力は伸びてきている。この成果を全体に広げていけるようにしたい。	○部科ごとの研究2年目の実践を通して、主体的・対話的で深い学びを通して、新しい時代に必要となる資質・能力（3つの柱：①生きて働く知識・技能②思考力・判断力・表現力③学びに向かう力・人間性）を身につける児童・生徒。			・研究2年目として取り組んでいく中で、児童生徒の意識も高まり、資質や能力も身についてきている。しかし、あまり身についていないとする意見もあり、定着がまだ不十分である。今後も引き続き取り組み、しっかりと定着を図っていきたい。	B	

様式 2

尤 実 及 び 専 門 性 の 向 上	教育研究部	○教職員が自ら研修を企画実施することで、視覚障がい教育の専門性の向上を図る。	○校内研修を動画撮影し、全職員で共有できるようにした。参加できなかった着任者も全員が研修を視聴することができた。研修担当者は、研修を担当することで視覚障がいの知識を深められたとしながらも、昨年度の研修に関する意見や要望が多数あった。研修の持ち方、研修内容や構成、着任者研修の時期、外部講師の招聘などを検討し改善していきたい。特に、点字指導の継承を校内研修でしっかり取り組んで欲しいとの要望があった。	○担当する視覚障がい教育の分野についての知識が深まり、研修を行うことができる。研修で学んだことを日々の授業に生かすことができる。特に、職員ひとり一人が意識して点字の継承に取り組んでいる。	○校内研修を年間１６回、視覚障がい教育に関する内容を中心に７分野に分けて実施する。 ○３年目以降の教職員は担当分野についての研修を２～３回担当する。 ○アンケートでの意見や要望を次回からの研修に生かす。 ○点字研修では、演習を多く取り入れ職員が実践に活用できるように工夫する。	○職員アンケートにより、研修について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 A　３分の２以上の職員 B　半数以上３分の２未満の職員 C　３分の１以上半数未満の職員 D　３分の１未満の職員	・今年度は、座学と演習を交えた研修や、日頃の授業実践を紹介する研修など、研修を担当する職員の創意工夫が随所に見受けられている。研修を担当したり、研修に参加したりして、視覚障がい分野の知識が深まり充実した研修ができたという割合が増えた。全職員に校内研修の重要性が広まり、参加できなくても動画視聴して研修内容を勉強する姿勢が見受けられた。また、研修内容についても教科指導や教育相談、センタ－的機能など幅広い要望が出ている。	A	・校内研修の内容を整理し、要望に出ている内容も検討しより充実した校内研修にしていきたい。来年度は年度当初に研修や研究授業等の動画や資料討の保存場所を全職員に伝え、いつでも授業改善に生かすことができるようにしていきたい。
			○昨年度コロナ感染症を防止するため、職員が一同に集まって密にならないように研修方法を検討し実施してきた。昨年度取り組んできたことは、今年度もしっかり継続していきたい。	○コロナ感染症を防止するため職員が一同に集まって密にならないように研修方法を検討し実施する。延期や中止になった研修内容を資料等（動画を含める）を見て学ぶことができる。	○会場を分散してリモートで実施し、コロナ感染症の防止に努める。 ○研修で使用した資料等（動画も含める）は、全職員が閲覧・活用できるように、保存場所を決め全職員に知らせる。	○職員アンケートにより、研修について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 A　３分の２以上の職員 B　半数以上３分の２未満の職員 C　３分の１以上半数未満の職員 D　３分の１未満の職員	研修の資料や動画の保存場所を明確にして、全職員に伝えた。十分、授業改善に生かすことができたという割合が増え、あまり、授業改善に生かすことができなかったという割合がかなり減った。研修や研究授業に参加できなくても動画視聴や資料を見て授業改善に生かしていこうとする姿勢が見受けられた。		
	小中学部	○主体的に仕事に取り組んだり、計画的に行動しようとしたりする意欲や態度の育成を図る。	○主体的に活動する姿が見られ、責任をもって取り組めるが、自分で計画して活動することは難しい。	○児童生徒が主体的に仕事に取り組んだり、計画的に行動しようとしたりしている。	○日々の活動や年間行事等の見通しを持たせ、具体的に何をすればよいか示しながら、活動できたことを称賛する。 ○キャリアパスポートを活用し、将来の夢や進路について本人への意識づけを図り、系統的に指導を進める。	児童生徒の行動による評価 A：児童生徒が主体的・計画的な行動ができた。 B：児童生徒が主体的・計画的な行動がだいたいできた。 C：児童生徒が主体的・計画的な行動があまりできなかった。 D：児童生徒が主体的・計画的な行動がほとんどできなかった。	目標を意識しながら主体的に学習や活動をすることができるようになりつつあるが、計画的に行動する場面では教師の支援を要することもあった。	B	主体的に仕事に取り組む場面や計画的に行動しようとしている場면을教職員間で共有する。過剰な支援にならないようにする。また、振り返りの時間を確保し、次の学習や活動に活かせるようにする。
	普通科	○生徒が自己理解に基づいた適切な進路選択・決定ができるよう、キャリア教育の充実を図る。	○作業学習や産業現場等における実習を通して、働くことについての理解や自己理解を進めている。今後、様々な経験をしながら卒業後の過ごし方や就労についてのイメージをつかんでいく必要がある。	○産業現場等における実習の経験や就労・社会参加に関する情報提供により、適切な進路選択・決定ができる。	○生徒の状況や希望に沿った実習先の選択、事前事後指導の充実を図る。 ○ハローワークや就労・生活支援センター等の関係機関とも連携して、就労・社会参加に関する情報提供を行う。	(３者)懇談や進路希望調査の結果を受け、部科教職員で評価を行う。 A：生徒が自己の進路を考え、進路選択・決定をしている。 B：生徒が自己の進路を具体的に考えている。 C：生徒が自己の進路を考える意識はあるが具体的には考えていない。 D：生徒が自己の進路を考える意識が不十分である。	１１月の実習を実施してそれぞれの生徒が実社会で働く経験を積んだ。それぞれの生徒が新たな挑戦をしながら自分の適性や成果と課題を考える機会となった。ある生徒は就労形態の希望が決まり、具体的な進路先の検討に入った。		
② キ ャ リ ア 教 育 の 推				○キャリアパスポートの作成と活用を通して、自己理解と受容が深まる。	○ホームルーム活動を中心として、生徒一人一人の目標修正などを支援し、個性を伸ばす指導へとつなげる。	キャリアパスポートを部科教職員で評価する。 A：キャリアパスポートの作成・活用により、十分に生徒の自己理解、自己受容が深まった。 B：キャリアパスポートの作成・活用により、十分に生徒の自己理解、自己受容が深まってきている。 C：キャリアパスポートの作成・活用により、十分に生徒の自己理解、自己受容が深まる兆しがある。 D：キャリアパスポートの作成・活用をしたが、十分に生徒の自己理解、自己受容が深まっていない。	行事の前後にキャリアパスポートを活用したことで、自己理解が深まったケースがあった。しかし、本校のパスポートの活用法は時期や内容が具体的ではないので、各担任の考えによって活用頻度に差があった。	C	キャリアパスポートの活用について、学校や部科で具体的に検討していく。

進	保理専攻科	○進路目標の具体化につながる体験活動や進路情報の提供、充実及びコミュニケーション力の向上を図る。	○生徒は、現場実習や職場見学、進路情報などを通じて、自己の進路について考えているが、1・2年生については希望先が明確な生徒は少ない。 ○患者さんや周囲の人と適切なコミュニケーションをとることに自信を持ってない生徒もいる。	○1・2年生は自己の目標が定まりつつある。 ○3年生は進路が決定している。 ○患者さんや周囲の人と適切なコミュニケーションができています。	○体験学習や見学の実施と、事前事後指導、生徒同士の報告会などによる個々のキャリア教育の充実を図る。 ○医療現場におけるコミュニケーションに関する講習会、理療に関する専門家を招いての講習会を設定し、専門性の向上を図る。また、臨床実習やマッサージ実習などでの対応について評価を受ける機会を設ける。	各学年の達成目標に対しての状況を総合的に判断。 A：全員の生徒が卒後の進路や生活についてわかりやすく伝えることができる。 B：8割の生徒が卒後の進路や生活についてわかりやすく伝えることができる。 C：5割の生徒が卒後の進路や生活について具体的に伝えることができる。 D：3割の生徒が卒後の進路や生活についてわかりやすく伝えることができる。 E：卒後の進路や生活についてわかりやすく伝えることができる生徒が3割未満である。	・産業現場等における実習や校外マッサージ実習、先輩の話を聞く会などを通して、生徒は自分の目指す進路について考えることができた。 ・生徒は、進路や将来の生活について、自分の思いを周囲に伝えることができていた。 ・特別非常勤講師によるコミュニケーションに関する授業で学んだ、医療面接の進め方や患者さんとの信頼関係形成のための工夫などを、実習の中で活かすことで、コミュニケーション力の向上につながった。	B	・各学年で実施した見学・体験学習について、見学先の様子や学んだことを生徒同士で共有する合同学習を設定し、生徒のキャリア教育の充実につなげる。 ・生徒の目指す進路の具体化につながる職場見学を計画・実施したり、引き続き情報提供を行っていく。
② キャリア教育の推進	支援部	○個に応じた進路情報の提供と進路実現に努める。	○生徒の居住地が全県にまたがっているため、県全域の職場開拓、求人等の情報が必要である。	○進路先や実習先の開拓及び情報提供を行うことで、進路選択の幅が広がっている。 ○コロナ禍による不測の事態に備え、産業現場等における実習、事業所見学、面接等の準備・打ち合わせを早い段階から綿密に行う。 ○就労促進セミナーなどで盲学校の生徒の就労・社会参加について広く情報を提供する機会を設ける。	○就労定着支援員、ハローワーク等関係機関と連携を図る。 ○コロナ禍による不測の事態に備え、産業現場等における実習、事業所見学、面接等の準備・打ち合わせを早い段階から綿密に行う。 ○就労促進セミナーなどで盲学校の生徒の就労・社会参加について広く情報を提供する機会を設ける。	児童生徒の取り組みとアンケートにより、総合的に評価A：生徒は得た情報を、将来の進路実現や実習先選別に役立てている。 B：生徒は自分の将来や進路に関する情報を得ようとしている。 C：生徒は自分の将来について、関心はあるが情報収集しようとしていない。 D：生徒は自分の将来や卒業後についてまだ関心がない。	・卒業生の話を聞く機会の設定により生徒は将来を具体的に考えることができた。 ・校内就労促進セミナーに企業、関係機関10団体の参加があり日頃のキャリア教育の取り組みを知ってもらえた。	B	・来年度も卒業生の話を聞く機会を部科のニーズに応じて設定する。 ・視覚障がい者の就労に関する理解啓発のため学校独自の就労促進セミナーを継続して実施する。
		○自立と社会参加に向け、児童生徒が自己の課題解決に向けた取り組みをするよう促す	○キャリア教育に関する自己の課題について、児童生徒の意識に差がある。	○児童・生徒がキャリア教育に関する自己の課題がわかり、解決に向けて取り組んでいる。	○キャリアパスポートの目標を掲示し、意識できるようにする。 ○個に応じたキャリアパスポートの作成、活用ができるように事例紹介や作成方法について支援部で話し合い、生徒に伝えていく機会を設ける。 ○産業現場等における実習や事業所見学を通して児童生徒が自己の課題に向き合う機会を設ける。	児童生徒の取り組みとアンケートにより、総合的に評価A：自分の課題を意識し、自ら解決に向けて取り組んでいる。 B：自分の課題解決に向け、すすんで取組もうとする姿が見られる C：自分の課題解決に向けてアドバイスを受けて取り組んでいる。 D：自分の課題解決に向けて取組もうとする姿がみられない。	・キャリアパスポートの目標を意識して実習したり、目標をステップアップして取り組んだりしたクラスもあった。 ・コロナ感染症拡大により3学期に予定していた実習が実施できず、体験に基づく課題認識の機会を得られない生徒もいた。	C	・年度当初にキャリアパスポートの目標を掲示するとともに取り組み事例を教員間で共有する。 ・実習について年度当初から中止、延期を想定した計画を作成し、実習機会の確保に努める。

様式 2

	寮務部	○卒業後を見据え、社会参加・自立した生活を送れるように主体性を育てる。	○保護者、保証人、鳥取盲学校各部科・鳥取聾学校との連携が円滑に取れつつある。更なる連携の強化を図り、共通認識し一貫して取り組み、舎生一人一人の主体性を育成することが課題である。	○卒業後を見据え、個別的教育支援計画の目標を達成し、舎生一人一人の主体的な行動が増えている。	○個別的教育支援計画のもとに、舎生一人一人の障がい特性を理解し、社会自立へ向けてスモールステップで指導支援を行う。 ○舎生に寄り添い、観察し、保護者保証人、部科との連携を密にすることで、情報を共有し、舎生の主体性を育むための生活指導・支援について、チームとして職員全体で創意工夫し、共有、実践する。	保護者・保証人、学部と連携し、個々の課題を共有し、スモールステップで実践することで、舎生の主体的な行動が A：全員増えた。（11人） B：8割以上増えた。（9人） C：6割以上増えた。（7人） D：4割以上増えた。（5人） E：3割以上増えた。（4人）	・舎生一人一人の個別的教育支援計画目標や課題を意識し、各自に応じたスモールステップで場を捉えて繰り返し指導支援することで、ほぼ舎生全員の主体的な行動が増えた。（10人達成） ・寮務部職員の連携が強まり、共通認識した一貫した取り組みを行い、チームとしての対応ができた。関係者（保護者・保証人、盲聾学校、管理職、担任、外部専門家等）とも必要に応じ連携し、共に取り組むことができた。	B	今後もチームとして関係者（保護者、保証人、盲聾学校管理職、担任、外部専門家等）との連携を取り、舎生一人一人の主体性の育成に向け、一貫して取り組む。
③ 仲間と協力する児童生徒の育成	小中学部	○相手の気持ちを考えた言動ができるようにする。	○相手を思いやる言葉遣いや行動が見られるようになってきたが、1人学級だと相手の気持ちを推し量ることが難しく、不用意な発言をしてしまうことがある。	○集団場面でも、相手の気持ちを考えた適切な言動ができる。	○居住地校交流、学校行事、日々の学校生活等を通して、教師が相手の状況や気持ちを伝え、相手の心情を考える場面を設定し、自分の考えが言えるようにする。その際、見守りや励ましを行う。	児童生徒の言動による評価 A：相手の気持ちを考えた言動がほぼできた。 B：相手の気持ちを考えた言動がだいたいできた。 C：相手の気持ちを考えた言動があまりできなかった。 D：相手の気持ちを考えた言動がほとんどできなかった。	自分のことだけでなく、周りの人たちのことを考えながら行動したり、場面に応じた適切な言葉遣いをしたりする姿が見られるようになってきた。	B	居住地校交流や他部科と関わる機会を持ち、一つひとつの具体的な場면을捉え、児童生徒と共にどうしたらよかったかを振り返る。
	指導部	○集団や社会の一員としての自覚を深め、自主自立・思いやりの精神を養う。	○小学部低学年から50歳の児童生徒がそれぞれ自分と向き合い、自己理解、自己の障がい理解を進めている。 ○年代、障がいの状況が大きく異なることから、他者のことまで考えが至らず、自分本位の考えになってしまいうこともある。	○児童生徒が自分も友だちも大切にし、仲間と協力して活動している。	○児童生徒会行事では、児童生徒の思いや希望を取り入れながら計画を立案する。 ○行事担当の児童生徒を中心にしながら、それぞれが役割を果たし、仲間と協力して活動できる場面を設定する。	児童生徒会行事後に児童生徒と教職員のアンケートをとり、その結果をもとに指導部で評価を行う。 A：全ての児童生徒会行事の企画に生徒の思いが反映され、児童生徒が役割を果たし、仲間と協力して活動する場面が設定された。 B：8割の児童生徒会行事の企画に生徒の思いが反映され、児童生徒が役割を果たし、仲間と協力して活動する場面が設定された。 C：6割の児童生徒会行事の企画に生徒の思いが反映され、児童生徒が役割を果たし、仲間と協力して活動する場面が設定された。 D：4割以下の児童生徒会行事の企画に生徒の思いが反映され、児童生徒が役割を果たし、仲間と協力して活動する場面が設定された。	募金活動や遠藤祭など児童生徒会の行事や活動については事前の話し合いを持ち、児童生徒と教職員が一緒に計画立案した。新型コロナウイルスの感染拡大のため中止やオンラインとなった行事もあったが、直接対面しなくても、録音や映像を活用するなどの工夫ができた。	A	児童生徒の中に、「自分たちで児童生徒行事を盛り上げたい」という雰囲気が生まれているので、教職員がサポートしながらこれまで通り児童生徒と教職員が一緒に立案・運営にあたるようにする。さらに事前学習の時間数の確保や計画的な運営に努める。
④ センター的機能の充実	支援部	○視覚障がい理解啓発を推進するため、盲学校のよさを積極的に情報発信する。	○学校等からの依頼を受け、感染防止対策をしながらねらいや依頼内容にあった研修内容を選び実施した。 ○県内市町村の乳幼児担当課に、乳幼児の見えにくさに関する教育相談のチラシを送付した。 ○中部地区教育支援センターわくわくの新設にあたり関係機関には、聾学校と協力してわくわくのチラシを配付した。	○校内の人材を活用し、多様なニーズに応じて支援を推進し、積極的に情報発信をして理解啓発につなげる。	○ホームページの支援部関連の部分について、最新の情報になるよう定期的に更新する。 ○おたより、お知らせ等で視覚障がいの情報発信をする。 ○交差点角の掲示板を活用し、センター的機能等の周知を図る。 ○ニーズに応じた支援を行ったり、研修会を提供したりする。 ○教育相談の事例検討を行い、見えにくさへのよりよい対応・支援方法を模索する。	A：校内の人材等を活用し、ニーズに応じた支援活動を推進しながら毎月定期的にホームページやおたよりで視覚障がいの情報発信をした。 B：校内の人材等を活用し、ニーズに応じた支援活動を推進しながら学期に2回以上は情報発信をした。 C：ニーズに応じた支援活動を推進しながら学期に1回情報発信をした。 D：ニーズに応じた支援活動を推進しながら年2回は情報発信をした。 E：支援活動を推進したが、情報発信はできなかった。	・つくしんぼ・きらら・わくわくだより第2号を発行した。 ・視覚障がい理解を深めるための資料をホームページに掲載した。	B	・3学期、そして次年度も継続してつくしんぼ・きらら・わくわくだよりを発行する。 ・視覚障がい理解のための情報発信の内容を精査し、今後も、数回に分けて掲載を続けていく。

⑤ 児童生徒の健康と安全を守る	小中学部	○望ましい生活習慣や防災意識の定着を図る。	○清潔、身だしなみ等の生活習慣の必要性は理解しているが、定着には至っていない。 ○防災意識はあるが、日常生活の中で忘れてしまうことがある。	○望ましい生活習慣や防災意識が定着し、安心安全な学校生活が送れる。	○清潔、身だしなみ等の生活習慣について、養護教諭と連携しながら定期的に指導をしていく。 ○計画的に防災学習を行い、危険回避ができるよう指導をしていく。	児童生徒の行動による評価 A：望ましい生活習慣や防災意識が定着した。 B：望ましい生活習慣や防災意識がだいたい定着した。 C：望ましい生活習慣や防災意識があまり定着しなかった。 D：望ましい生活習慣や防災意識がほとんど定着しなかった。	手洗い、手指消毒の習慣は定着し、自分の身だしなみに気を付ける姿が見られるようになってきた。避難訓練の事前・事後指導、防災学習もある程度でき、防災意識は高まってきた。	B	身だしなみ等の生活習慣は繰り返し指導していく。避難訓練等の事前・事後指導だけではなく、日々の朝の会、帰りの会などで防災意識を高めていく。
	指導部	○感染症予防の対策がとられ、児童生徒が安心安全に学校生活を送ることができる。	○新型コロナウイルス感染症の流行により、学校生活の様々な場面で感染症予防の視点から見直したり、個々の予防行動の実践が必要となっている。	○児童生徒が感染症予防に関し、安心感をもって学校生活を送っている。	○感染症予防の視点から、学校生活環境を見直す。 ○児童生徒が、自らすすんで感染防止のための一般的な予防行動をとることができる。	アンケートで評価 A：感染症予防の視点からの学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動が十分できている。 B：感染症予防の視点からの学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動が概ねできている。 C：感染症予防の視点からの学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動があまりできていない。 D：感染症予防の視点からの学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動がほとんどできていない。	児童生徒へのアンケート結果（A～Dまでの選択肢） 中間評価に比べ、A評価が1名減となったが、各自が意識して感染対策に取り組んでいる。 A：（7名） B：（3名） C：（0名） D：（0名）	A	感染症対策も長期間にわたっているため、取り組んでいることに達成感を感じづらい点が課題。評価の手立てを考えていく。
		○個々の健康課題解決に向けて取組を行い、健康的な生活を送るために支援する。	○小学部低学年から50歳代の児童生徒がおり、それぞれ年齢や基礎疾患、体力の状況等に応じてさまざまな健康課題がある。	○児童生徒が健康課題に目を向け、自ら心身の健康の保持増進に取り組もうとする態度や実践力が養われる。	○学部や教科等と連携して、個別のプログラムを組み年間を通して実践していく。	児童生徒が達成度を自己評価する。（中間・最終） A：全ての児童生徒が目標を達成できたと評価している。 B：8割の児童生徒が目標を達成できたと評価している。 C：6割の児童生徒が目標を目標を達成できたと評価している。 D：目標を目標を達成できたと評価した生徒が4割以下である。	児童生徒へのアンケート結果（A～Dまでの選択肢） 中間評価に比べ、A評価が2名増となった。目標を意識して取り組んだと感じている生徒が多かった。 A：（4名） B：（4名） C：（2名） D：（0名）	B	鳥苷健康力アッププロジェクトを継続して、児童生徒と教職員と一緒に活動に取り組む。
⑥ 環境整備を通じた業務の改善	総務部	○共有フォルダの見直しを行う。	○担当者が、行事等計画立案の際、過去の同じ行事計画データを部科分掌フォルダ内に保存したままにするため、共有フォルダ内に同じフォルダが複数できている。 ○各自の判断でフォルダ内にデータの保存をしているため、参考データを探す際に時間がかかる。	○共有フォルダ内は、保存のルールに則ったデータ管理ができている。 ○業務に必要なデータを短時間で探し出すことができる。	○共有フォルダ内のデータ保存のルールと整理について提示し、周知徹底を図る。 ○重複保存されているデータの整理を行うとともに、業務改善に務める。 ○必要以上に残している個人の写真動画データについても保存の見直しを行い、個人情報流出等につながらないようにする。	共有フォルダ整理に関する進捗状況の評価 A：各部科・分掌のフォルダ内の整理が過去3年分終了した。 B：各部科・分掌のフォルダ内の整理が過去1年分終了した。 C：各部科・分掌のフォルダ内の整理が今年度分終了した。 D：各部科・分掌のフォルダ内の整理に取り掛かれていない。	共有フォルダの整理については、日々進めており、容量の大きいデータについては、圧縮し、データ容量の削減・整理を行っている。	B	引き続き、共有フォルダの保存についてのルールの周知徹底と整理を行う。
	総務部	○オンラインサービス（Gmail、Meet、fece time Zoom等）の有効活用を行う	○Zoomの職員研修会は、昨年度開催したが、新任者への研修は実施していない。Googleクラスルーム等は、数名の職員は研修会で使用しているが、全職員への周知はできていない。オンライン学習の実施に向けて、基礎知識を得るとともに、技術の習得をめざす。	○オンラインを含めたサービスの活用を図り、業務の改善をめざす。	○校内で、職員研修を行い、有効な活用方法を学ぶ。	オンライン学習に向けての操作に関する評価 A：手順を覚え、一人で活用できる。 B：マニュアルを見ながら一人で活用できる。 C：支援を受けながら一人で活用できる。 D：一人で操作することが、難しい。	マニュアルを活用しながら各自で、オンラインの研修会等に参加できるように操作技術の向上がみられるようになってきた。	B	具体的な研修内容の精査を行い、全職員の技術の向上をめざす。今後も継続して、全職員研修や各部科・分掌での研修会で取り組んでいく。
	教務部	○諸表簿等の適切な管理と各種事務処理の円滑な推進を図る。	○年度始に諸表簿等一式と事務処理年間予定を提示し、学期末・年度末により詳細な情報提供を行っている。さらに適切で円滑な各種事務処理を推進するために、諸表簿の改善が必要である。	○来年度実施に向けて、出席簿をデータ化する。	○出席簿をデータで管理できる様式を作成する。 ○視覚障がいのある教職員も管理できる様式を提案する。 ○作成した様式を試行し、意見を集約して改善する。	出席簿のデータ化の進捗状況による評価 A：職員会議で承認され、新様式が完成した。 B：運営委員会で承認され、職員会議で提案するところである。 C：原案を作成し、改善中である。 D：原案を作成中である。	出席簿のデータ化が完了した。入力操作に慣れるよう、今年度1月分を試行実施している。	A	新年度始めに改めて出席簿のデータ管理について説明を行うとともに、データの定期的な保存について体制を整える。

評価基準 A：十分達成 B：概ね達成 C：変化の兆し D：まだ不十分 E：目標・方策の見直し

〔100%〕 〔80%程度〕 〔60%程度〕 〔40%程度〕 〔30%以下〕